

シンポジウム

「関連性理論との対話」

—関連性理論は語用論の新しいモデルになりうるか—

西山 佑司

「関連性理論 (Relevance Theory)」と呼ばれる、Sperber & Wilson によって開発された新しい語用論モデルが誕生してかれこれ20年以上になる。当初、英国言語学界のごく限られた学者のあいだでのみ注目されていたこの理論は、その後、多くの研究家の興味と関心を引くことになった。とくに、Sperber & Wilson (1986) 以降のこの理論の発展には目を見張るものがある。この理論を諸言語に適用して得られた優れた研究成果が次から次へと発表されており、理論自体も改訂されつつある。また、この理論は、言語学界だけでなく、認知科学、心理学、哲学、文学研究、美学、記号論といったおよそ人間言語や精神にかかわる隣接分野にも多大のインパクトを与えてきた。最近では、関連性理論で学位論文を執筆する者もすくなくないばかりか、語用論の入門をグライス理論ではなく、いきなり関連性理論の枠組みで始める者もめずらしくない。「関連性理論は、語用論を初めて科学にした」とか「関連性理論は、語用論に真の革命をもたらした」と公言してはばからない者もいる。

2000年2月に刊行された今井邦彦著『語用論への招待』(大修館書店)は関連性理論の立場から書かれた語用論入門書である。ところがこの書のタイトルのどこにも「関連性理論」の語は見あたらない。今井氏によれば、「関連性理論」とわざわざ断る必要がないのは「関連性理論こそが、人間の認知の深奥を探る研究プログラムの一部を成す、真の語用論であると信ずるから」(同書、まえがき)ということである。つまり、今井氏は、この書で「関連性理論でないかぎり、真の語用論とはいえない」という見解を explicit に表明しているわけではないが、そういう implication を読者に与えているのである。

では、関連性理論が今日の言語学界、語用論学界に広く受け入れられ、この理論にたいする評価は今や完全に定着した、と言えるかという実はずしてそうではない。多くの語用論研究者にとって、語用論の標準的なモデルは、やはりグライス理論、あるいはその延長線上にあるネオ・グライス理論と考えられているようである。とくに、最近のネオ・グライシアンによる研究は、たとえば、Levinson (2000) に見られるように、関連性理論にたいする対決姿勢をかなり強めているといえる。このようなネオ・グライス理論には、Searle and Vanderveken (1985)、Vanderveken (1990)、Vanderveken (1994)、Vanderveken and Kubo (2001) などにおける「現代の言語行為理論」をも含めることができよう。また、関連性理論は、発話解釈なるものを、心的

表示にたいして推論的計算が関わる「認知的な事柄」であるとみなしており、その意味で認知体系の本質を解明しようとする理論であると言ってさしつかえない。ところが、この理論は、同じく「言語と認知」の問題に関心をもついわゆる認知言語学や認知意味論とはかなり様相を異にしていることも事実である。当然のことながら、認知言語学や認知意味論の立場からなされる関連性理論にたいする批判にも根強いものがある。

本シンポジウムの目的は、このようなコンテキストにおいて関連性理論とそれに批判的な立場とのあいだの論争点を浮き彫りにし、「関連性理論は語用論の新しいモデルになりうるか」という問題を検討することにある。まず関連性理論の立場から今井邦彦氏、現代言語行為理論の立場から久保進氏、そして認知言語学の立場から中村芳久氏に登場していただき、それぞれの立場から問題提起をしていただいた。

今井氏は、まず、『語用論への招待』の内容を手がかりにして関連性理論の要点を説明した。とくに、発話解釈機構を、「汎用的な心の理論」としてではなく、「関連性」に基礎を置く領域特定の module として捉えるべきであるとする議論を展開した。今井氏は、それらの議論を踏まえて、まず、言語行為理論に内在する問題点を指摘した。とくに、言語行為理論における「断言」「行為拘束」「行為指示」「宣言」「感情表現」の5つが原始発話内効力 (primitive illocutionary force) であり、他は派生的であるとする主張にたいして疑問を投げかけた。さらに言語行為理論が、字義的言語行為 (literal speech acts) と非字義的言語行為 (non-literal speech act) を区別し、前者は意味論の対象であり後者は語用論の対象であるとみなしている点について今井氏は言及し、まさにその点が誤った言語観・伝達観に基づいているとして批判した。一方、認知言語学について今井氏は、「認知言語学は、言語現象を一般的な認知能力あるいは認知プロセスの反映として説明しようとする言語理論である」と位置づけ、言語能力の module 性を強調する生成文法理論や発話解釈機構の module 性を強調する関連性理論との違いを浮き彫りにした。今井氏は、そもそも「一般的な認知能力なるもの」が解明しつくされていない現段階で、「認知一般から言語現象を説明する」試みには限界があるのではないかと、という問題提起をおこなった。

久保氏は、現代の言語行為理論の観点から、「関連性理論による言語行為論批判は、現代の言語行為理論にたいする根本的誤解に基づいている」という趣旨の議論を展開した。Searle and Vanderveken (1985) 以降の現代言語行為理論の仕事は、「発話内論理」 (illocutionary logic) と呼ばれる現代論理学の一種を用いて形式的に明確な形で言語行為の理論を構築しようとしたものである。発話内論理では、すべての発話内効力が少数の基本要素 (primitives) から帰納的

(recursive) に定義される。そして、現代の言語行為理論は「発話の成功と充足の帰納理論」をより綿密なものに作りあげていくことを目的にしている、とされる。言語行為のような非真理条件の対象を、このようにあくまで形式的に厳密なモデル意味論でもって説明しようとする試みは革新的である。久保氏は、このような現代の言語行為理論は、Austin (1962)、Searle (1969)、Searle (1979) などの古典的な言語行為論とは異なっているにもかかわらず、関連性理論による言語行為論批判は、もっぱら古典的な言語行為論に向けられており、的はずれである、と主張した。たとえば、関連性理論は「言語行為論においてはすべての命令文の諸機能が命令文という言語形式によってコード化されていることを前提にしているがこの前提に問題がある」として言語行為論を批判する。しかし、久保氏は、現代の言語行為理論では、発話における意味の基本単位は文のような言語形式ではなく、発話内行為とみなしているため、この批判は当たらない、と反論する。

ここでの問題は、現代の言語行為理論の基盤が古典的な言語行為論のそれと本質的にどこが異なるか、という点であろう。今井氏は、言語行為理論の基盤は現在もすこしも変化していないとする立場から、その基盤に内在する問題点を指摘した。関連性理論は、「言語行為論というレベルはそもそも存在しない」と一貫して主張しており、その意味で、言語行為論がどんなに厳密に形式化されたとしても、関連性理論が言語行為理論をそのまま受け入れることはなく、この点で、言語行為現象をめぐる両理論のあいだの論争は今後いっそう活発になるとと思われる。なお、久保氏は、関連性理論がもっぱら聞き手の解釈理論の立場をとると対照的に言語行為論は話し手の生成理論の立場をとり両者は補完するものであるという興味深い見解を表明した。「発話のもつ効力が、聞き手の解釈と無関係に話し手側の条件だけでどこまで決定されるか」という問題を慎重に検討することによって、この「補完」の中味も明らかになるとと思われる。

中村氏は、認知意味論ではすべて（形態素から文まで）の意味は、認知ベースとプロファイル部との関係で表されるが、プロファイル部が関連性理論で言う「論理形式」(LF) に、また、認知ベースが「明意」(explicature) に相当するのではないかということを示唆した。また、発話がどのようなスクリプトのどの部分に位置づけられるかが推定されて理解される結果が「暗意」(implicature)にほかならないという示唆もした。また、中村氏は、暗意を推定する過程は、関連性理論による説明とは異なり、むしろスクリプトに基づくデフォルト的判断が先で、前提から結論への論理的推論は補強的な働きでしかない可能性もあるということも指摘した。さらに、中村氏は、法助動詞の意味は、(認知主体が認知ベース内にいるかどうかという)主体化(subjectified)の機能を表示できるモデルでなければ捉えられないこと、また認知主体が認知ベースから抜け出す「脱主体化」(de-subjectification)という認知プロセスを指定することによ

ではじめて、法助動詞の客観的読み、否定の各用法の連続性、日本語と英語の類似表現間に見られる明意の一般的な相違などについても解明される可能性があることを具体例で説明した。

もし関連性理論と認知意味論で導入されている概念が中村氏の示唆するような対応関係をもつのであればきわめて興味深い。ただ、認知意味論ではプロフィール部と認知ベースが不可欠の対となって意味を表すとされており、両者は独立に規定できないのにたいして、LFは生成文法の統語論の出力であり、語用論的な概念である明意から独立に規定されている点に大きな違いがある。一般に、枠組みが異なった理論のなかで導入された概念同士を（枠組みを越えて）比較し、対応関係をつけることは容易ではない。中村氏は、〈語・文や発話の意味は、認知ベースやスクリプトの一部分として適切に位置づけられた時に、理解される、あるいは関連性が高い〉という趣旨のことを述べたが、問題は、「適切に位置づけられる」という概念を直観的に理解するのではなく、理論的にどのように規定するかにある。その規定の際に、「関連性の原理」のようなものが要求されないかどうかは吟味に値する問題であろう。「暗意は、論理的な計算をする前にデフォルト的判断としてすでに出来上がっているのではないか」とする中村氏の指摘は大変興味深い。ただ、今井氏のコメントにもあるように、論理計算が瞬時に行われている可能性もある。また「デフォルト的判断」が効いているとしても、その判断に論理的推論が本当に無縁であるかどうか吟味しておく必要がある。さらに、中村氏が力説する「主体化した意味」なるもの、あるいは脱主体化プロセスによって得られるとされる「客観的読み」なるものが、module説に立脚する「生成文法+関連性理論」のアプローチで原理的に処理不可能であるかどうかは、検討に値する興味深い問題である。

このように、本シンポジウムにおいては、関連性理論とそれに批判的な立場とのあいだで、その基本的アプローチがいかに異なっているかということが具体例の分析を通じて一層あきらかになったといえる。今世紀の語用論研究は、関連性理論の研究者とネオ・グライシアンおよび認知言語学者とのあいだの激しい、しかし実りある論争を通して、力強く推進されていくであろうことは疑いえないのである。

参考文献

- Austin, J.L. 1962. *How to Do Things with Words*. Oxford: Clarendon Press.
- 今井 邦彦. 2000. 『語用論への招待』東京：大修館書店.
- Levinson, S. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Searle, J. R. 1969. *Speech Acts: an Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge

University Press.

Searle, J. R. 1979. *Expressions and Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.

Searle, J. R. and D. Vanderveken. 1985. *Foundations of Illocutionary Logic*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sperber, D. and D. Wilson. 1986/95. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

Vanderveken, D. 1990. *Meaning and Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.

Vanderveken, D. 1994. *Principles of Speech Act Theory*. Montréal: Université du Québec à Montréal.

Vanderveken, D. and S. Kubo (eds.) 2001. *Essays in Speech Act Theory*. Amsterdam: John Benjamins.